LGBTQも精神医療も、言わなければ変わらない

芦沢 茂喜

鹿島 真人 先生

お忙しい中、講義をして頂き、ありがとうございました。

私は民間の精神科病院などで仕事をし、現在は山梨県職員として勤務しています。

鹿島さんのお名前は、長い間、精神科病院で強制入院を経験され、地域での生活を始めた、時男さんを取り上げた番組を見た際に、私は知りました。私は大学の実習で、長期の社会的入院をしている方を担当し、その方との出会いを通して、精神保健福祉のフィールドで仕事していくことを決めました。これまでなかなか光が当たることのなかった社会的入院、精神科病院への強制入院について取り上げられたことに、当時の私は嬉しかった。それと、ともに悔しかった思いがありました。

時男さんがテレビで取り上げられ、その後、時男さんを原告に、国を相手に裁判が申し立てられました。裁判が申し立てられると、それを支援する会が組織され、医師や看護師、私のようなソーシャルワーカーなどが名を連ね、支援のネットワークが作られていきました。私が入会している日本精神保健福祉士協会では、協力のチラシが配布され、時男さんを支援する方々の講演会などが企画され、機関誌では訴訟を応援するのが精神保健福祉士の責務のような話が掲載されていました。私はそのような流れを横目で見ながら、何とも言えない気持ちになりました。

精神保健福祉士は、時男さんのように、精神科病院へ社会的入院をされている方々の支援、もっとストレートに言えば、社会的入院の解消を目的に創設されました。資格の創設に伴い、多くの人が私も含め、資格を取得し、仕事に就くようになりました。精神科病院にも多くの人が勤務しましたが、社会的入院者の数は減りませんでした。私たちは何ができたのか、何ができなかったのか。国に、社会に訴えることはいくらでもできたのかもしれませんが、最終的に声を挙げたのは当事者である時男さん。時男さんが行動しなければ、動くことができなかった私たち、専門職。情けない気持ちになりました。社会的入院のことを社会課題として提起できる立場であった私たちが何もせず、鹿島さんたち、テレビ局の皆さんが社会に問いかける状況に、正直悔しい思いがありました。

裁判は高裁の判決でも違憲判決が出ず、原告である時男さんが裁判活動を続けることを断念する結果とはなりましたが、社会がこの問題を考える大きな契機になったと思います。その後、直近の国の検討会では、治療の必要性がない対象への入院制限についての話が国か

ら出るなど、変化が少しずつ見られるようになったと感じます。

今回、LGBTQでも、言わなければ変わらない、言うことで変わるとの話もありましたが、現状のデータを集め、諸外国の状況も含め、整理し、問題を可視化し、社会に訴えていく取り組みが大切であることを改めて感じました。また、センシティブな話のため、なかなか議題として挙がりにくい印象もありますが、議題として挙がらなければ、間違った情報をもとに、偏見などが増幅していくリスクもあることから、正確な情報を伝え、議題として積極的に話をしていく土壌を作っていくことも重要であると思いました。

本日は、ありがとうございました。